The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『虎鈐経』の兵学思想 |
| Author(s) | 湯浅, 邦弘 |
| Citation | 大阪大学大学院文学研究科紀要. 2001, 41, p. 1-26 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/4200 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『虎鈐経』の兵学思想

湯浅邦弘

## 序言

明の唐順之『武編』は、前集六巻五十四門、後集六巻九十七門という大部の兵書である。[1]『四庫全書総目提要』は、この『武編』について、「録する所の前人の旧説は、孫・呉・穰苴・李筌・許洞の諸兵家言より、唐・宋以来の名臣奏議に至るまで、摭集せざるは無し」とその総合性を高く評価している。

ここに言われる「前人の旧説」の内、「孫・呉・穰苴」は、各々『孫子』『呉子』『司馬法』の著者と目される兵家であり、それらの兵書は、『尉繚子』『三略』『六韜』『李衛公問対』とともに「武経七書」としてまとめられ、中国古代を代表する兵書として、宋代以降、武学の必修科目に指定されていた。

これに対して、「李筌・許洞」の「兵家言」は、「武経七書」に比べてその知名度は遥かに劣る。ではなぜ唐順之は、権威ある「武経七書」の兵家言に加えて、この李筌『太白陰経』と許洞『虎鈐経』を重視したのであろうか。

もとより唐の『太白陰経』と北宋の『虎鈐経』は、「武経七書」以降に編纂された兵書の内では、各々全十巻、全二十巻二百十篇から成る本格的な兵書である。しかし、唐順之がこれらの書に着目した理由は、単にその分量の多さということだけではなかったように思わ

れる。

では如何なる点が唐順之の心を捉えたのであろうか。その一つの手がかりとして注目されるのは、『虎鈐経』編纂の過程である。許洞は『虎鈐経』を編纂する際、主として『孫子』と『太白陰経』に依拠したと述べている。[2] この内、『太白陰経』については、既に前稿に於て考察した通り、独特の理論構造を備えていた。そこでは、孫呉の兵法に代表される人為重視の兵学思想の中に、天文暦数・望気占術等の呪術的要素が包摂されていた。李筌は、種々の占術を収集・整理して掲げ、それらを権謀的兵法の立場から冷静に活用せよと主張したのである。[3] この『太白陰経』を許洞が尊重していることは、『虎鈐経』の思想的特質を考える際、極めて重要である。『太白陰経』と『虎鈐経』には思想的連関が窺えるのか、また、それが唐順之『武編』に於ける評価と如何に関わっているのか。

本稿では、こうした観点から、『虎鈐経』の構造を解析し、その思想的特質と意義について検討を加えることとしたい。以下、行論の手順としては、先ず『虎鈐経』に対する従来の評価を整理しつつ、問題の所在を明らかにし、続いて、『虎鈐経』二十巻の内容、及び「序」「表」について順次考察を加え、更に『虎鈐経』と後続の兵書との関係について検討してみることとしたい。

## 第一章　先行研究の整理と問題点

近年の兵学思想研究に於て、『虎鈐経』の評価は、ほぼ一定していると言って良い。例えば、王顕臣・許保林『中国古代兵書雑談』（戦士出版社、一九八三年）は、『虎鈐経』を、後世に影響を与えた宋代最初の兵書と評価する。しかし、その中身については、前半部には、『孫子』の「素朴弁証法思想」と『太白陰経』の「唯物主義自然観」とが見えるものの、後半部には「時代の烙印」を押された「八卦占ト星雲望気」などの内容が存在すると説く。これは、『虎鈐経』全二十巻を前半十巻と後半十巻とに大別した上で、前半を肯定、後半を否定するという明快な批評である。

同様に、『中国軍事史』第四巻『兵法』（『中国軍事史』編写組編、解放軍出版、一九八八年）も、『虎鈐経』前半十巻を、『孫子』から『太白陰経』に至る前代の兵書の集成と概括する一方、後半十巻は「兵陰陽」説に属し、荒唐無稽な内容で、兵学的には何の価値もないと断定する。また、熊武一主編『古代兵法鑑賞辞典』（軍事訳文出版社、一九九一年）も、こうした評価を承けて、『虎鈐経』は、『孫子』

『太白陰経』を継承・発展させて、素朴な哲学思想を備え、少なからぬ新見解を提示したと説く一方、後半十巻には世俗的な迷信の色彩が見られるとする。更に、鈕先鍾『中国戦略思想史』（黎明文化事業公司、一九九二年）は、『虎鈐経』の思想と構成とに着目して、『虎鈐経』が孫子と李筌を主要な思想的来源としつつ、多くの世俗的観念も受容していること、『太白陰経』の構成を模倣していること、などを指摘する。しかし結局、戦略思想という観点からは前人の説を踏襲しているだけであり、また後半十巻は、陰陽五行などの迷信的観念であって全く価値はない、と厳しく批判している。

こうした評価は、最近刊行された大部の『中国軍事通史』にも見られる。馮東礼・毛元佑『北宋遼夏軍事史』（軍事科学出版社、『中国軍事通史』第十二巻、一九九八年）は、『虎鈐経』の前半十巻（「相人」の部分を除く）は科学的に軍事を論じたもの、後半十巻は「封建迷信の談」が多いと論ずる。また、毛元佑氏には論文「《虎鈐経》与《孫子兵法》」（『孫子学刊』一九九三年第二期）があるが、そこで毛氏は、『孫子』と『虎鈐経』とを比較し、『虎鈐経』は『孫子』に比べて理論性・体系性が弱いと指摘する。また特に、『孫子』が、迷信的方法による勝敗予測を極力批判したのに対して、『虎鈐経』はそうした「封建迷信の類の糟粕」を廃棄しないばかりか、逆に集大成しており、それが本書の最大の欠陥であると論じている。

もっとも、『虎鈐経』の思想的意義を努めて評価しようとするものも見られない訳ではない。例えば、高鋭主編『中国軍事史略』中冊（軍事科学出版社、一九九二年）は、北宋の軍事思想を、衰退から恢復への発展過程にあると概括した上で、それを示す好例として、『武経総要』『何博士備論』『百戦奇法』などとともに『虎鈐経』の名を挙げている。また、張雲勛『中国古代軍事哲学発展史簡編』（中国広播出版社、一九九二年）は、『虎鈐経』に於ける「王」と「将」の議論を踏まえて、そこに、宋代軍事制度に対する許洞の批判的精神が窺えることを指摘する。同様に、謝国良・袁徳金『中国古代軍事思想概論』（中国人民解放軍出版社、一九九四年）も、『虎鈐経』に於ける「変化」の重視は、宋王朝の固定的な陣法を批判するものであると説く。更に、柳玲『中国古代兵書』（台湾商務印書館、一九九四年）は、将軍論や「地利」思想に『虎鈐経』の特徴があると指摘し、同様に、謝祥皓『中国兵学宋元明清巻』（山東人民出版社、一九九八年）も、『虎鈐経』の「地形」の分析には創見があると論ずる。

しかしながら、これらも結局は部分的な評価に止まり、『虎鈐経』全体の思想的意義となると、先の諸書同様、後半十巻の存在が高い評価を思い止まらせているようである。[4] こうした状況は、前稿に於て検討した李筌『太白陰経』に対する先行研究の評価と極めて良く似

ている。『太白陰経』も、やはり、思想的に相容れない二つの部分から成り立っていると考えられてきた。『虎鈐経』も同様に、後半は様々な占術を説く「迷信的」部分であって評価に値しない、という訳である。

そして、こうした評価は、実は、『四庫全書総目提要』にも既に窺うことができる。以下にその主要部分を引用してみよう。

虎鈐経二十巻宋許洞撰。……乃ち孫・李の要を演じ、而して天時・人事の変を撮り、備さに其の占を挙ぐ。凡そ六壬、遁甲、星辰、日月、風雲、気候、風角、鳥情より以て宣文設奠、医薬の用、人馬相法に及ぶまで、具載せざるは莫し。四年を積みて書成る。……大都前人の説を彙輯して参ずるに己が意を以てす。惟だ第九巻載する所の飛鶚、長虹、重覆、八卦の四陣、及び飛轅塞の諸図は、洞自ら創すと為すのみ。其の四陣統論は自ら以為らく遠く李筌の纂する所に勝ると。其の間亦た迂闊誕渺の説多く、諸を施行に見るに足らず。然れども考うるに漢書芸文志兵家者流に、兵権謀、兵形勢、陰陽の諸類、凡そ七百余篇有り。蓋し古来此の専門の学有り。今、漢志に録する所の者は久しく已に亡佚す。而して洞独り能く遺文を掇拾し、撰次して帙を成す。一家の言に非ずと謂うべからず。録して之を存するは、亦た以て一説を備うるに足るなり。

このように、『四庫提要』は、先ず、『虎鈐経』の内部構造について、「孫（武）・呉（起）の要」を継承発展させている部分と、「天時・人事の変を撮り、備さに其の占を挙」げている部分から成っていることを指摘する。また、その内容は、概ね「前人の説を彙輯」してその中に自説を加えたものであり、中には「迂闊誕渺の説」が多く、実際の施行には耐えないものもあると説く。もっとも、『虎鈐経』の記載が、『漢書』芸文志の分類する「兵権謀、兵形勢、（兵）陰陽」[5]に広く及んでいる点については、一定の評価を与え、「一家の言に非ずと謂うべからず」「一説を備うるに足る」と賛辞を惜しまない。

しかしながら、そうした評価は、亡佚した資料を許洞が「独り能く遺文を掇拾し、撰次して帙を成」したという点に向けられたものであって、『虎鈐経』全体の兵学思想としての価値に向けられたものではない。『四庫提要』の控え目な評価も、やはり、『虎鈐経』が『孫子』『呉子』流の兵学を継承する部分と様々な占術を記載した部分との二つの要素から成り立っているという理解を前提としているのである。

それでは、この二つの部分は、内容的に矛盾対立したまま混在しているのであろうか。それとも、何らかの整合性を持って併存しているのであろうか。以下では、『虎鈐経』の思想内容について検討を進めてみたい。

## 第二章　『虎鈐経』前半部の検討

先ず、『虎鈐経』全二十巻の内訳を、以下に列挙してみる。なお、①②等の数字は巻数を表し、また、（缺）とあるのは、内容が失われていて篇名のみ伝えられていることを示す。

①天功、地利、人用、三才応変、三才随用
②辨将、論将、出将、軍令、船戦、歩戦
③兵機統論、軍謀、教戦、先謀、先勝、勝敗、知姦、奪恃、襲虚、任勢、使間、分守
④十可撃、五不可撃、五異、五機、被囲、囲冦、防敵、候敵、追敵、詭敵、困敵、周備、遠近
⑤料地、生地、死地、料山、料水、料塵、料敵陣、料敵営、料用天気、料用地形、逆用古法
⑥水戦、水利、水攻、過水、尋水脈、火利、火攻、守城、築城、城壕、防城、反浸、弩台、烽火台、望楼、馬鋪、遊奕、守城具、攻城具、地聴、失道
⑦旗幟、大将旗鼓、陣将旗鼓、金鼓、蠡角、鼓角、漏法、伝箭、測影
⑧結営統論、六甲、地勢、山勢、四獣、握奇営、偃月営、教弩、教弓、教旗、校猟、軍楽、軍賜、大将軍員、陣将軍員、隊将軍員、征馬、牧放
⑨四陣統論、飛鶚陣、長蛇陣、重覆陣、八卦陣、飛轅陣
⑩相人、金瘡統論、治金瘡方、疫気統論、治疫気、治皺瘃、禳厭、相馬統論、馬忌、馬毛利害、治馬金瘡薬、治馬雑病
⑪天時統論、出軍日、四戦図、孤虚、九戦法、地兵灋、黄幡虎尾、遊門、八卦、五姓、天罡、雷公、十二将、三九
⑫六壬伝課、遁甲遊都、五行勝負、戦位、八宮
⑬占相兵臨利害、占兵巳交勝負、占伏兵、占疑左右近地伏兵、占偸城及擄掠、占疑有人謀己、占災危、占野地立営止宿、占渡関梁探

賊

⑭占星統論、日、月、雑星、客星、妖星、流星、彗星

⑮五星統論、木星、火星、金星、水星、土星

⑯分野統論、老人星、大火、析木、星紀、元枵、娵訾、降婁、大梁、實沈（缺）、鶉首（缺）、鶉火（缺）、鶉尾（缺）

⑰雲気統論、雑運気、勝兵雲気、城上雲気、将軍雲気、伏兵雲気、姦賊雲気、敗兵運気

⑱天、地、虹蜺、雷霆、戦候、雑占、占風統論、五音占風、刑殺占風、十二位占風、占逆風、風雨雑占、八節占風

⑲時加占烏情、運加占烏情、雑占烏情、時加占烏情、六甲占烏情

⑳誓文、祭毘沙門天文、祭風伯雨師、祭山川神文、祭黄帝文、祭蚩尤文、祭八神文、祭當境神文、禡牙旗神文、禡門旗文、禡五方旗文、禡六纛旗文、禡五兵文、禡馬文、釁鼓文、回兵

右の篇名を一覧する限り、『虎鈐経』は、先行研究によって指摘されるように、確かに、前半十巻と後半十巻とで大きく内容が異なるような印象を与えている。前半は、巻二の「将」に関する諸篇、巻三の「謀」に関する諸篇、巻五の地形に関する諸篇など、概ね孫呉の兵法を想起させるような篇名が並んでいる。これに対して、後半は、巻十三の諸占術、巻十四の占星術、巻十七の占雲気術など、先行研究によって「迷信」「糟粕」と酷評される篇名が続く。これまで『虎鈐経』が前後半に二分して考えられてきたのも、確かに無理からぬことである。

しかし、仔細に篇名を調査してみると、そうした二分的把握に若干の問題があることにも気づく。例えば、「天功、地利、人用、三才応変、三才随用」の諸篇から成る巻一は、「天」「地」「人」の三者の関係を説いていることが予想され、その内容については充分な吟味を加える必要がある。また、前半部巻九の「八卦陣」や巻十の「相人」なども、果たして「孫呉の兵法」の範疇に入るのか疑問が持たれる。

こうした状況から、直ちに想起されるのは、先に検討した『太白陰経』の構成である。『太白陰経』も、従来は、巻一「人謀」から巻五「預備」までの前半部と巻六「陣図」から巻十「雑式」までの後半部とでは、その性格が大きく異なり、前半は人為主体の合理的兵法、

後半は様々な占術を取り込んだ迷信的内容、という評価が一般的であった。しかし、先に検討した通り、そうした分断は必ずしも適切ではなく、前半部にも「迷信」的内容が認められ、逆に後半部にも「合理」的思考が看取できた。全く相容れないと思われていた両者は、実は李筌の中では整合的に捉えられていたのである。

とすれば、この『虎鈐経』についても、同様の可能性が考えられるのではなかろうか。そこで先ず、本章では、従来の研究によって比較的高く評価される前半十巻の部分について、その内容を考察してみることとする。

なお、『虎鈐経』の通行テキストについては、四庫全書本（清・乾隆三十年［一七六五］勅輯文淵閣本）、摛藻堂四庫全書薈要本（于敏中編輯、清・乾隆三十八年［一七七三］抄本）、粤雅堂叢書本（初編第七集所収、伍崇曜輯、清・咸豊二年［一八五二］南海伍氏刊本）などがある。また、『中国兵書集成』第六冊（《中国兵書集成》編委会編、解放軍出版社・遼沈書社、一九九二年）は北京大学図書館所蔵李盛鐸蔵書明刻本を影印して収録している。(6) ここでは、伍崇曜が諸本を校訂して粤雅堂叢書本に収めたテキストを底本とし、右の諸書と対校して文字を改める必要があると思われた場合には、その文字を直後の（　）内に記すこととした。また、書名については、『宋史』文苑伝は「虎鈐経」、同・芸文志は「虎鈐兵経」と記していて合致しないが、以下では、通行の「虎鈐経」を使用することとしたい。

さて、『虎鈐経』巻一の諸篇は、「天」「地」「人」を「三才」として論じている。ここから想起されるのは、むしろ天人相関の思想であり、三者の関係や各々の内容によっては、「合理的」「科学的」という従来の肯定的評価にも大きな影響を与えることが予想される。

先ず、ここで言われる「天」「地」とは何であろうか。巻頭の天功篇を検討してみよう。

> 天道は変化し、消長は万彙す。地の力に契(あ)いて乃ち成る有り。天は貴くして地は賤し。天は動きて地は静かなり。貴き者は機を運らせ、賤しき者は力を效す。上其の動有りて下其の地を行う。是を以て知る、天の地に施すこと専なるに匪(あら)ざるも、地の天に応ずること常あり。

ここでは、天と地との関係について、「天」―「貴、動、運機」、「地」―「賤、静、效力」という対応関係を示した後、「天」に「地」が応ずるという主従関係を説く。従って、この天と地は、言わば物事の二面性や対応関係を説明する語として登場しているのであり、少なくとも、「兵陰陽」家が説くような呪術的性格を持つ天地ではない。事実、「天」「地」は、その直後で次のような対応関係としても示され

る。

王は天なり、将は地なり。将は天なり、士卒は地なり。我は天なり、敵は地なり。此に由りて其の動く所を観る。故に負勝知るべし。

つまり、王と将軍、将軍と士卒、自軍と敵軍との関係を、各々「天」と「地」の関係に比定しているのである。そして、こうした天地の働き（即ち右の諸関係）を正しく理解する者のみが勝敗を察知することができると説く。篇末では、こうした主旨を、「故に天は必ず地の力を藉りて、然る後四気を運らせ、生殺を正すなり。貴は必ず賤の力を藉りて、然る後能く元功を立てて王業を建つるなり」とまとめている。

次に、これに続く地利篇はどうであろうか。

・地の形、険易殊なるなり。地の気、寒熱異なるなり。形と気とを用うるは、逆順を知るに在り。

・是の故に利は以て専一なるべからず。北人の馬、南人の航なるや、各々便なる有り。

・善く兵を用いる者は利を択びて之に従わば善し。

右の如く、地利篇で説かれる「地」とは、具体的には地形の険易・寒熱のことである。軍事的勝利は、そうした多様な地形の特質を見極め、それに抗うことなく利用することによって得られると説いている。従って、この「地利」も、『孫子』に説かれるような、自軍に有利な自然地理的条件に他ならず、五行や八卦に基づく地の利といった「兵陰陽」的内容ではない。

このように、『虎鈐経』巻頭に説かれる「天」「地」は、いずれも人為を重視する兵学思想の枠内で理解し得る内容であり、決して「迷信的」「呪術的」内容ではない。また、これは、後続の三才応変篇、三才随用篇に於ても同様である。

・或いは曰く、軍、天時に違い、地利に逆うも、大将深謀沈毅、部伍静粛にして、進退に節有らば、之を如何せん。許洞曰く、未だ撃つべからず。……許洞曰く、先ず人を以てし、次に地を以てし、次に天を以てし、然る後之を攻むれば、必ず敵に克つなり。曰く、先後之を如何せん。曰く、利もて主と為す。何をか主と謂う。曰く、動もて客と為し、静もて主と為す。敵の動き如何を観て、乃ち之に応ず。先ず勝ちて後挙ぐ。神明の道なり。（三才応変篇）

・天は吉凶を著すに陰陽を以て弁ずるなり。地は険易を布くに山川を以て章すなり。人の包む勇怯は戦陣を以て見わるるなり。苟く

も陰陽の順、険易の利、勇怯の用を欲すれば、閑暇に在りて得て択ぶに在り。（三才随用篇）

三才応変篇では、敵軍が天時・地利を得てはいるが人為を乱している場合、逆に、人為は整っているが天時・地利を得ていない場合を想定し、各々撃つべきか否かを問う。これに答えて許洞は、人為を重視して攻撃の判断を下すべきであるとする。即ち、敵軍にとって天候も地理的条件も良くないが、敵の大将が冷静沈着、士卒も整然として行動に節度があれば、攻撃すべきではないと判断するのである。許洞は、天地人三者の重要性を指摘しつつ、同時に「人、地、天」との優先順位を示し、最終的には「利」を指標として人為を重視し、敵の動きに柔軟に対応して戦術を立て、その立案段階で先ず勝利してから実際の行軍に移るべきであると説く。こうした主張は、人為、権謀、開戦前の敵情把握を重視するという点に於て、『孫子』の「廟算」の思想を髣髴とさせる。

また、三才随用篇では、天の吉凶、地の険易、人の勇怯を正しく認識した上で、それらに柔軟に対応し、またそれらを選択して利用すべきことを説く。ここで言われる「天」とは、雨雪などの天候の急激な変化であり、「地」は地形の険易、「人」は勇敢・怯懦という人の性格を指す。いずれも、三才応変篇同様、最終的には「人」の側に力点が置かれており、人為・権謀の思想の一環として理解することができる。

このように、『虎鈐経』巻一の諸篇は、「天功」「地利」といった篇名にも拘わらず、極めて合理的な兵学を説いており、「迷信的」「呪術的」要素は皆無であるように感じられる。

ところが、人用篇には、その篇名からは想起しづらい内容も存在し、若干の注意を要する。

今の世の人を取るや、毎に其の多学に務めて其の偏技を捨つ。良術に非ざるなり。兵家の利とする所、其の長短に随いて之を用いるなり。是を以て善く撫恤する者は、頻りに闘わしむる勿かれ。其の労疲して勇無きを慮るなり。善く保守する者は、進攻せしむる勿かれ。其の遅緩して猛ならざるを慮るなり。多方なる者は、事を決するに与らしむる勿かれ。其の猶予するを慮るなり。勇多き者は、与に敵を謀る勿かれ。其の軽きに過ぐるを慮るなり。精悍なる者は闘わしめ、果敢なる者は攻めしむるなり。……善く鼠窃狗偸する者は、盗号探敵せしむ。悪言多罵なる者は、之をして揚毀訾詈せしむ。奇材異識なる者は、談論に預らしむ。深識大度なる者は、衆を安んぜしむ。屈強多力なる者は、棒莽を斬闘せしむ。善く地形の結構に随う者は、樹を度り柵を営ぜしむ。怯懦なる者は、器用を運輦せしむ。老弱なる者は、炊汲に備えしむ。

これは、軍事に於ける人材登用論である。通常の任用では、「其の多学に務めて其の偏技を捨つ」のように、一人の人間に多くの才能を期待するものであるが、軍事に於てはそうした全人格的な資質・能力を要求せず、その一部にでも秀でた点があれば活用すべしとする。つまり、「其の長短に随いて之を用いる」のように、個人の才能・性格を把握した上で、適材適所の任用に努めよ、と主張するのである。

注目されるのは、活用すべしとされる種々の才能の内訳である。例えば、許洞は、他者に対して哀れみ深く「善く撫恤する者」については、「頻りに闘わしむる勿かれ」とし、その理由として「其の労疲して勇無きを慮るなり」と説く。また「保守」的性格の人間については、「進攻せしむる勿かれ」とし、その理由として「其の遅緩して猛ならざるを慮るなり」と説く。同様に、「多方なる者」は、気を回しすぎて躊躇するから「事を決するに与らしむる勿かれ」とし、「勇多き者」は、軽率であるから「与に敵を謀る勿かれ」とする。また、同じ勇者についても、「精悍なる者は闘わしめ、果敢なる者は攻めしむるなり」と、微妙な使い分けを説いている。

こうした人材登用論は、既に先秦の兵書にも見られ、兵学思想の中では古くから重要な主題となっているが、(7)『虎鈐経』の中で特徴的なのは、「善く鼠窃狗偸する者」「悪言多罵なる者」「怯懦なる者」「老弱なる者」などをも活用すべき人材として取り上げる点であろう。彼らは、通常の人材論ではまず取り上げられない者たちである。ところが、「善く鼠窃狗偸する者」も「盗号探敵（諜報活動）」に才能を発揮し、「悪言多罵なる者」も「揚毀訾詈（言葉による陽動・撹乱）」という点で役立ち、「怯懦なる者」も「器用」の「運輦」に、「老弱なる者」も「炊汲」に使役することができると論ずるのである。

更に、次のような占術に関わる者たちも、重要な人材として取り上げられている。

七曜の休咎に明かなる者は、歴数の士と為す。善く風雲の吉凶を占う者は、候気の士と為す。六壬遁甲に暁き者は、日時を選ぶの士と為す。蓍亀を諳んずる者は、卜筮の士と為す。是の四人の者、験体を推して陰陽を測り、各々相乱れしむるべからず、其の専一なるを貴ぶなり。

許洞は、「明七曜休咎者」「善占風雲吉凶者」「暁六壬遁甲者」「諳蓍亀者」の四者を各々「歴数之士」「候気之士」「選日時之士」「卜筮之士」として活用することを説く。彼らは、分野こそ異なるものの、各々占術の専門技術者であり、許洞は、彼らの占断の結果が軍事に大きな影響を与えることを認識している。もっとも、許洞はこれらの占術に全面的な信頼を置いている訳ではない。何故なら、各々の占断が異なっては意味がなく、「其の専一なる」という点が肝要であるとされているからである。即ち、許洞は、これらの占断の結果が合

致するよう意図的な操作を加えた上で、自軍の作戦行動に活用しようと考えているのである。その具体的な様相の一端は、右の人材論の中にも、「妖言詐辞し、善く鬼神の心を張皇し、天命を推引する者は、声を揚げて衆を惑わし、以て敵心を動かしむ」と見える如くである。

そして、こうした人材をも活用しようとする任用方法は、次のような好結果を生むと許洞は論ずる。

故に我が大衆の内、善有り悪有るも、人を棄つること無し。人棄つる所無し。斯れ怨まざれば則ち動きて功有らん。

かかる任用方法は、各々の長所を活用して「人を棄つること無」いから、登用されなかったという怨恨は生ぜず、各々が自己の才能・性格を活かして功績を挙げることができる。許洞はこのように本篇をまとめ、人事に伴う士卒の感情にも配慮している。

このように、『虎鈐経』巻一の諸篇は、基本的には、人為の重視を基盤とする権謀的兵学を説きながら、その中に、「兵陰陽」に関わる要素を若干含んでいることが分かる。もっとも、それは、『虎鈐経』に二つの異なる兵学的立場が混在することを意味している訳ではない。許洞はあくまで、軍事的な人材活用論の中で、あらゆる才能を有効に活用せよと説いているだけである。しかしながら、「兵陰陽」の思想を真正面から厳しく排撃する兵書もある中で、「卜筮の士」などに対する[8]『虎鈐経』の姿勢は、極めて寛容であるように思われる。それでは、他の巻に於て、こうした要素は見られるのであろうか。また、「合理」と「迷信」との関係はどのように考えられているのであろうか。そこで先ず注目されるのが、将軍について論じた巻二の論将篇である。

万機論に曰く、百万の師有りと雖も、呑敵を恃むは将なる者に在り。将を恃むや、夫れ国の利器を挙げて以て之に授く。苟くも其の人に非ずんば、是れ天下を軽んず。将何を以て為さん。小大を謂わば各おの四有り。八者皆無ければ、何ぞ以て之を将と謂うに足らん。其の大なる者は、一に曰く天将、二に曰く地将、三に曰く人将、四に曰く神将。其の小なる者は、一に曰く威将、二に曰く彊将、三に曰く猛将、四に曰く良将。凡そ師を興し衆を挙げ、営を列し陣を結ぶには、旌旗の動きを視、金鼓の声を審にし、日を揆り時を度り、以て吉凶を決す。五行の運転に随い、神位の出入に応じて、以て用兵を変うれば、敵人其の来る所を測らず、神を以て兵を用うれば、我が師其の為す所を知らず。動に度有り、静に方有り、勝負は先見に在り、天地鬼神の心を持ち、以て士衆を安んず。此を之れ天将なる者と謂うなり。

ここでは、三国魏の蔣済の「万機論」[9]を引用する形で、将軍の資質について論じている。そこでは、将軍の具備すべき性格・資質を八

つに分けて論じ、その内の「天将」については、興軍の際に「旌旗の動きを視、金鼓の声を審にし、日を揆り時を度り、以て吉凶を決」し、用兵の際に「五行の運転に随い、神位の出入に応じて、以て用兵を変う」という性格規定がなされる。即ち、「天将」とは、先見の明により「士衆を安んず」ることのできる将軍である。ここでも決して、人為的努力を放棄して日時や五行に勝敗を委ねるなどということを論じている訳ではない。しかし「天将」は、恰も「天地鬼神の心を持」つかの如き先見の明により、士卒を安心させる必要があり、そのためには、「旌旗の動き」「金鼓の声」「日」「時」「五行の運転」に精通していることが肝要である、と説くのである。

これも、右の人用篇と同じく、「兵陰陽」的内容を、便宜的にとは言え、重要な軍事情報として認めていることになろう。同様に、巻四の十可撃篇、候敵篇にも、そうした性格を読み取ることができる。

敵人鬼を信じて祈禱する者多きは、必ず疑懼を懐きて人に任ずる能わざるが故なり。一の撃つべきなり。敵惟だ天時に務め、其の方位を択び、其の雲気を観、地形の険易を顧みず、人心の逆順を詳にせざるは、二の撃つべきなり。

十可撃篇とは、攻撃可の要件を十例掲げた内容となっている。そこでは、攻撃して良い第一、第二の要件として、(敵が)「鬼を信じて祈禱する」「惟だ天時に務め、其の方位を択び、其の雲気を観、地形の険易を顧みず」の如く、敵が迷信に囚われていることを先ず挙げている。ここで言われる、鬼神を信じて祈禱し、天時・方位に拘泥し、雲気を観望するというのは、正しく「兵陰陽」の内容である。許洞はこれを、「地形の険阻を顧み」ず人為的努力を放棄した愚行と考える。しかし、このことは、現実問題としてこうした「迷信」に深く囚われている者が多数存在していたことを示唆していよう。[10] とすれば、将軍は、敵軍の将や士卒がこうした要素を盲信している可能性があることを前提に、かかる知識に精通している必要に迫られよう。許洞と「迷信」的要素との関わりは、このような観点から把握すべきであると思われる。

また候敵篇も同様に、敵を撃つべき要件として次のような例を挙げている。

両師未だ合せざるに、先ず敵人の情を候う。……鬼神を畏るる者は、驚かすべきなり。懦くして善く人を用いる者は、欺くべきなり。将に是の十五有る者は、之を撃つに疑うこと無かれ。……動きて日耗月刑を避くる能わざる者は、撃つべきなり。諸将功を争う者は、撃つべきなり。……是の十者、能く候いて之を撃つに疑うこと無かれ。

ここでも、敵情を観察した結果、「鬼神を畏るる者」「日耗月刑を避くる能わざる者」など、敵が迷信に囚われていることを、重要な指

標として掲げている。もとより、許洞自身は、そうした要素を信じていないからこそ、撃つべき要件として掲げている訳であるが、そのためには、自軍の側も、そうした知識に一応通じておく必要があると言えよう。また、時にはそれらを逆手にとり、対敵謀略として活用することも想定される。

その際、重要になってくるのは、先の人用篇に見られた占術者たちである。彼らが口にする占断の結果は、将軍の権威と相俟って、士卒に多大の精神的影響を与えることとなろう。(11) 将軍の言に耳を貸さぬ者も、占術者の言には素直に従うという局面も充分に想定される。巻五の料用天気篇には、より明快に「望気者」の存在とその意義が説かれている。

望気者、気の勝敗を以て大将に告ぐ。敵の気衰うるを観れば則ち進攻し、気旺(さか)んなれば則ち兵を止め、与に戦う勿かれ。此れ之れを天時に順う者と謂う。彼の気旺んにして、他人皆懼怯し敢て兵を進めず、我独り勇にして進み、反って能く必勝するは、何ぞや。智を以て気に逆うに在るのみ。時に順任する者なり。……夫れ天は勝敗の気を専にせず、人に由りて之を用いるのみ。兵家は万変す。此れ其の一なり。

この許洞の論は、軍中に於ける「望気者」の存在を前提にしている。「望気者」は敵軍の気を観望し、「気の勝敗を以て大将に告」げる。将軍はこの報告を基に、もし敵の気が衰退していれば進攻し、敵の気が旺盛であれば合戦を避ける。

ところが、現実には、こうした「気」の様相と勝敗の結果とが合致しない場合も多い。許洞はむしろそうした事態を想定している。例えば、敵の気が盛んで自軍に不利と思われていたにも拘わらず、自軍が勝利する場合があるのは、自軍の「智」謀が偶然「気」と異なっただけで、大局的な「時」には順応していたからであると説く。即ち、許洞にとって、天と人との関係は、「天は勝敗の気を専にせず、人に由りて之を用いるのみ」というものであり、最終的には、「気」に対する柔軟な対応と「人」事の重要性が主張されているのである。つまり、「望気者」の観望する「気の勝敗」は決して人事を拘束するものではなく、実際の勝敗は、やはり「人」の側に懸かっていると考えるのである。

ただそれにしても、許洞の思想は、「合理」と「迷信」を指標とする限り、かなり際どい要素を含んでいると言えよう。前半最後の巻十に見える相人篇もその一つである。

凡そ擢用せんと欲すれば、先ず須らく人の形神肌骨の貴賤を辨ずべし。且つ人の神は中に隠れ、形は身に蔵れ、気は外に発すれば、

先ず其の形を観るべし。

この「相人」とは、人材登用の際、その人物を如何に見分けるかを説いたものであり、決して、呪術的内容ではない。内に隠れた精「神」が発現するところの外「形」に留意せよ、というのは至極当然の主張であるとも言える。しかし一方で、これは、目・鼻・口、黒子・皺の位置などによってその人の運命を鑑定しようとする神秘的な相人術と紙一重であるとも言えよう。ここに、許洞の兵学思想を、徹底した合理主義と即断できない側面が認められる。(12)

以上、『虎鈐経』の前半十巻を取り上げ、その兵学思想の特質について検討を加えてきた。その結果、先行研究によって高く評価される『虎鈐経』前半部には、確かに合理的な用兵思想が説かれていることが確認された。それが許洞の兵学思想の根幹であったことは疑いない。しかしながら同時に、軍事に於ける占術や望気などを重要な技術として容認する思考も見られた。『虎鈐経』は、「兵陰陽」的要素を全く無視したり排撃したりするのではなく、軍事に「利」ありと認めた場合には積極的に活用せんとしている。従って、この前半部に関する限り、許洞の兵学的立場は、李筌『太白陰経』のそれに極めて類似していると言えるであろう。

## 第三章　『虎鈐経』後半部の検討

それでは、後半十巻は如何なる思想的立場に立脚しているのであろうか。引き続き、本章では、『虎鈐経』後半部を検討してみよう。『虎鈐経』の巻十一から二十までは、個々の篇名を一覧する限り、確かに「迷信」的色彩が濃厚である。この後半部は、前半部と相容れない呪術的内容に満ちているのであろうか。そこで先ず、「天時」について概論する巻十一の天時統論篇を分析してみよう。

ここでは先ず、「天時なる者は、兵家の主なり」と、「天時」の重要性が説かれている。また、その「天時」の具体例として挙げられているのは、「星辰の変見、雲気の聚散、六壬の旺相、遁甲の休咎、風露雷雨の動作」等であり、概ね「兵陰陽」家の尊重する内容であると言って良い。許洞は、これらを内実とする「天地の正」に「順応」せよと主張する。

しかしながら、許洞は同時に、人事による吉凶の変更の可能性や人為の重要性についても次のように論じている。

然りと雖も黒気晷に出で、赤気軍に臨み、六窮風を起こし、三形霧を生じ、皆敗象を為すも、其の時に当たり、苟くも能く其の凶

変を観、政を修めて身を謹しみ、地をトいて営を遷し、天に応じて日を揆(はか)り、譴戒を恭受して警省す。此れ以て凶を易えて吉と為すべし。斯れ乃ち以て道に順い天に応ずる者なり。臣今列する所の時日雲気暦象の間、其の占候既に一ならず。用兵に在りては、其の時に因りて択びて之を用いるなり。若し能く善もて人心を服し、以て天地の情に順い、陰陽の性を和し、灾咎をして見せしめず、政令権智の其の道を得るに率(したが)い由れば、又た何ぞ天時を審占して以て候と為すに仮らんや。

例えば、「黒気塁に出で、赤気軍に臨み、六窮風を起こし、三形霧を生じ、皆敗象を為す」という「凶」兆を得ても、「政を修めて身を謹しみ、地をトいて営を遷し、天に応じて日を揆り、譴戒を恭受して警省す」という人為的努力によって、「凶を易えて吉と為す」ことが可能であると説くのである。従って、許洞は、「天時」の不可避性や人為の無力を論じているのではない。

また、そもそも許洞が列挙する「時日雲気暦象の間」に於ても、「其の占候既に一ならず」という不確かな状況であり、許洞は、そこに確固たる信頼を置いている訳でもない。戦況に応じて「択びて之を用いるなり」というのが許洞の基本的姿勢であることが分かる。つまり、許洞にとって最も重要なのは人事であり、結局は、人事が万全であれば「天時を審占して以て候と為す」必要はない、とまで断言するのである。

かかる主張が後半部冒頭の「統論」に示されていることは極めて重要である。何故なら、巻十一以下に列挙される諸占術も、それらがこうした「統論」の意識の下に列挙されているとすれば、その意味合いは相当に異なってくると思われるからである。そこで、後半部の諸篇について、検討を進めてみよう。

月殺月虚の日は、将に命じて出征するに利(よろ)し。又曰く、十二月中、各々出軍に吉凶の日有り。……若し急難有れば、時の吉辰を択びて動き、此の日を用いざるも、可なり。

先ず、巻十一の出軍日篇は、出軍の日の吉凶を延々と列挙する。しかし、一方では、右のように「急難」の際の例外を認めている。これも、許洞が吉凶日を絶対的に信じているのではなく、あくまで自軍の行動を有利にする選択肢の一つと考えていることを示唆しているであろう。許洞にとって、こうした「日時」は、固定的確定的なものとして意識されているのではなく、「利」の有無という観点から柔軟に捉えられているのである。

次に、星宿について論ずる巻十四の占星統論篇はどうであろうか。

臣謹んで星経及び諸伝記を按ずるに、凡そ諸星中外に宿し周天に羅列するは、蓋し隠かに変化を見し、下人事に応ず。七曜往来以て経緯と為り、災変の作るは、実は茲に在り。凡そ大将為るもの星位を詳察して以て休咎を占わざるべからず。或いは受命の術を興し、或いは敗亡の兆を起こす。此れに由らざるもの鮮し。……是を以て聖人は春秋二百四十二年の間を以て、日食三十六、彗星三たび見われ、夜明るくして常星見えず、夜中の星殞雨の如きもの、皆之を書す。当時禍乱輒ち応じ、上下怨を交え、諸侯犇走し、戦伐並び興り、其の社稷を保たざる者、勝えて数うべからず。是れ元象変を示すは吉凶の徴なるを知る。凡そ将為る者之を詳かにせざるべからざるなり。

ここでは先ず、諸星の位置が「人事」に対応しており、「災変」の原因をなしているとの認識が示される。[13] そして、「大将為るもの星位を詳察して以て休咎を占わざるべからず」と、星位の観察と「占」星の必要性が説かれる。また、これに続く後半部では、『春秋』の災異記事と当時の戦乱との関係が説かれ、災異に関する事項が将軍必須の知識であることが論じられる。

こうした許洞の主張は、先に検討した天時統論篇の主張と一見矛盾するかの如くである。ここでは、人事よりも災異が重視されているような印象を受ける。しかしながら、これも、許洞の提示する選択肢の一つと理解すべきではなかろうか。この「占星」を初め、個々の占術には各々意味があり、それらに精通していることは確かに重要である。しかし、実際にそれらを選択し利用するかどうかは「人（将軍）」に懸かっている。許洞の意図は、最終的にはやはり「人」の側の柔軟な対応・選択という点にあるのではなかろうか。

同様のことは、雲気について論ずる巻十七の雲気統論篇にも窺うことができる。

臣聞く、百人已上ならば、勝敗の気必ず具わる。是を以て之に順う者は昌え、之に逆う者は亡ぶ。天地は無言なるも、吉凶象を以てす。雲気を占いて異有らば、必ず災変に契（あ）う。

許洞は、百人以上の集合体には必ず「勝敗の気」が現れるとし、雲気の観望の重要性を説いている。こうした主張自体は、人事主体の兵学を説く前半十巻とは明らかに矛盾している。しかし、この統論に続く雲気関係の各篇を検討すると、単なる矛盾とは断定できないように思われてくる。

例えば、巻十七の敗兵運気篇には次のように見える。

夫れ師を興し衆を動かすに、天勝敗の気を以て人に告ぐる者、以（ゆえ）有るなり。常に勝気なる者は之を恃むべからず。当に軍政を修め、

智慮を精にし、号令を厳にし、賞罰を正すべし。此れ以て天地の貺に答うべきなり。苟くも或いは勝気を恃み、而して軍政修まらず、荒怠して度を敗れば、此れ以て勝を反して敗と為すべきなり。敗気に遇う者、詎ぞ能く必ず敗れん。当に以て教令を厳にし、智慮に謹しみ、躬を責め己を罪し、恭しく天譴に答うべし。此れ敗を変じて勝と為すべきなり。大将勝敗の象を以て、修徳の方を立てざるを得んや。

この篇は、軍事活動と雲気との関係について論じている。雲気と言えば、楚漢の興亡の際、劉邦の陣営の上に五色の雲気が立ち上っていたという『史記』の記載を待つまでもなく、古来極めて重視されてきた軍事情報である。[14] ここでも先ず、興軍に際し「天勝敗の気を以て人に告ぐる者、以有るなり」とその重要性が指摘される。ところが一方で、「常に勝気なる者は之を恃むべからず」と雲気の徴候に対する全面的な信頼に警告が発せられ、むしろ、「軍政を修め、智慮を精にし、号令を厳にし、賞罰を正す」という人為的努力が肝要であるとされる。従って、「敗気に遇う者」もそれで敗北が決定する訳ではなく、「教令を厳にし、智慮に謹しみ、躬を責め己を罪」するという人為的努力によって「恭しく天譴に答」えれば、「敗を変じて勝と為す」ことができるという。

このように、許洞は、「勝敗の気」を、決して固定的なものとするのではなく、むしろ人為的努力によって大きく変更し得るものと考えている。即ち、「勝敗の象」とは、「修徳」（人為的努力）の方策を立てるために先ず観望すべきもの、と認識されているのである。[15]

以上、先行研究によって否定的に捉えられる後半十巻について検討を加えてきたが、ここには、確かに種々の占術が列挙されており、「迷信的」という印象は拭いきれない。しかしながら、許洞は、後半冒頭の天時統論篇に於て、最終的には「人事」が勝敗の鍵を握ると明言していた。また、それに続く諸篇に於ても、諸星の位置や雲気の様相は、必ずしも絶対的なものとして捉えられているのではなく、人為的努力を促すために柔軟に活用すべきものとして説かれていた。

このことは、前半十巻に窺うことのできた「合理」と「迷信」との関係を髣髴とさせる。つまり、前半十巻では、権謀を主体とする合理的兵学を説きながら、同時に、占術の専門技術者の登用を論じたり、望気者の存在を前提として議論を進めるなど、「迷信的」要素をも戦術の一環として柔軟に利用せんとしていた。それが軍事行動にとっての「利」であるなら、積極的に活用しようというのが許洞の姿勢であった。これに対して後半十巻は、具体的な占術を列記してその重要性を説きつつ、同時に、それらの占断が固定的なものではなく人為によって変わり得ることを主張していた。とすれば、前半十巻と後半十巻とは、決して「矛盾」しているのではなく、むしろ表裏一

体の関係にあると言えるのではなかろうか。

## 第四章　序・表の検討

それでは、こうした仮説は、他の資料によって裏付けることはできるであろうか。そこで次に、『虎鈐経』の内容自体を離れ、『虎鈐経』執筆の動機や編纂の経緯を記した「序」「表」を検討してみることにしよう。

虎鈐経とは将軍の事なり。臣素より奇正の変を好む。是に由りて之を言うなり。古より兵法多し。然れども孫子の法は奥にして精、学者をして暁用に難からしむ。諸家の法は、膚くして浅し。或いは用いる者師律を喪い、浅深長短、迭ごも表裏を為し、酌中の理、誠に得難し。又、李筌著す所の太白陰経、心術を論じては則ち秘して言わず、陰陽を談じては則ち散じて備わらず。是を以て之を観れば、誠に美を具うるに非ず。臣今上は孫子李筌の要を採りて、明かに其の術を演べ、下は天時人事の変を撮りて、備に其の占を挙げ、或いは己見を作し、或いは古人を述ぶ。名づけて曰く虎鈐経と。然らば則ち奇謀詭道、或いは六経に合せざるも、既に兵家の要用と為る。故に必ず貫穿条縷して以て之を備う。六壬遁甲、星辰日月、風雲気候、風角鳥情は、人事に遠しと雖も、亦た敢て遺漏せず。宣文設奠、医薬の用、人馬の相に至りては、軍中に補うこと有り得る者、具載せざるは莫し。自から一家の言を為す。

先ず、『虎鈐経』の自序には、右のような執筆の経緯が記されている。そこでは、許洞が平素から「奇正の変を好」んでいたこと、それ故「将軍の事」を記した『虎鈐経』を編纂するに至ったこと、『孫子』の兵法は「奥にして精」であり真意を捉えがたいこと、逆に諸家の兵法の内容は「膚くして浅」いこと、また、李筌の『太白陰経』は「心術」については「秘して言わず」、「陰陽」については「散じて備わらず」といった様相であること、などが論じられる。そして、こうした状況を踏まえ、「上は孫子李筌の要」を採択して「明かに其の術を演べ」、また「下は天時人事の変を撮りて、備に其の占を挙げ」る、という執筆の基本的姿勢が表明される。

ここで注目されるのは、孫子と李筌の兵学を基盤にしながら、同時に「天時人事の変」「其の占」をも採録すると表明している点である。また、「奇謀詭道」という他者を騙す行為は「六経」の主旨に合致しないものの、既に「兵家の要用」となっているとし、「六壬遁甲、星辰日月、風雲気候、風角鳥情」の類も、「人事に遠」いものではあるが、遺漏なく記載するとしている点も重要である。更には「宣文

設奠、医薬の用、人馬の相」なども軍事に関わるものであれば、「具載せざるは莫し」とする。

このように『虎鈐経』編纂の第一の意図は、兵学の統合・集大成にあったと考えられる。従って、そこには、「合理」か「迷信」かといった二者択一的思考は見られず、要するに軍事関係の諸情報を網羅せんとする意識が濃厚である。また、その際、『孫子』とともに『太白陰経』の名が挙げられていることは、『太白陰経』の折衷的・総合的性格が『虎鈐経』に強い影響を与えていることを示唆していよう。

同様のことは、「上虎鈐経表」にも窺うことができる。

臣洞言う、重門擊柝[16]は、暴客を待つ所以なり。弦弧剡矢は、天下を利する所以なり。竜韜を閲して拓統[17]し、虎略を奮いて禦侮するは、三代より以来、未だ廃して用いざる者有らざるなり。……著書二十篇、名づけて曰く虎鈐経と。其の書を要するに上は人謀を言い、中は地利を言い、下は天時を言う。紛拏錯綜すと雖も、終始備具し、枝分派別し、凡そ師中に在りて吉なる者は、必ず貫穿条挙す。其の正道を引き不庭を征すること有るには、則ち尭舜の謀具わり。四夷を伐ち異類を馭するには、則ち周宣の武尽く。廟謨を建て経済を開くには、則ち良平の策存り。詭道を用い奇謀を出すには、則ち韓白の機在り。禽鳥の声を聴き、風雲の変を察するには、則ち師曠離婁の議挙ぐ。古人の志を撮り、愚慮の得る所を剖きて、其の間に叢萃す。亦た兵家の淵藪なり。

ここでは、先ず戦争・軍備の正当性が述べられる。兵は「暴客を待つ所以」「天下を利する所以」であり、歴史を遡ってみても、「三代自より以来、未だ廃して用いざる者有らざるなり」と、その正当性が主張される。こうした正当化の論理は、中国兵学に於ても古くから見られる、言わば常套手段である。[18] 許洞は、こうして兵書自体の存在意義を確認した後、『虎鈐経』の構成と内容について、「上は人謀を言い、中は地利を言い、下は天時を言う」と、上中下に三分類し、「人謀」を「上」として掲げる。これは、巻一の諸篇や巻十一の天時統論篇に示された認識と同様である。即ち、許洞が天地人の全ての領域に亘って論述しようとしたのは、「凡そ師中に在りて吉なる者は、必ず貫穿条挙す」という実利主義に基づくものであった。また、その中で最終的な鍵を握るのはやはり「人」であると考えられているのである。

更に許洞は、軍事の目的・方法を五分類して示す。第一は、「其の正道を引き不庭を征す」、第二は「四夷を伐ち異類を馭す」、第三は「廟謨を建て経済を開く」、第四は「詭道を用い奇謀を出す」、第五は「禽鳥の声を聴き、風雲の変を察す」というものである。この内、

第一は、中国版聖戦とも言える「義兵」の立場であり、ここではその代表として堯舜が挙げられている。第二は、秦漢帝国以降、中国最大の懸案となった対夷狄戦、攘夷戦であり、ここでは周の宣王がその代表として挙げられる。第三は、国家の創建に関わる軍事行動であり、第四は、権謀術数を駆使した戦争である。更に第五は、鳥獣の声を聴き、風雲の変化を察知するというもので、師曠・離婁[19]がその代表として挙げられている。これは、先の「序」にも見えた「六壬遁甲、星辰日月、風雲気候、風角鳥情」とともに、「兵陰陽」の兵法を想起させる内容である。つまり、許洞の示す五類の軍事活動の内、四つまでは人事の枠内で理解し得るもの、残る一つは「兵陰陽」の内容と考えられる。

とすれば、やはり許洞は、人為主体の兵学思想を基盤にしつつ、その中に「兵陰陽」的要素を意図的に包摂しようとしていたのではなかろうか。許洞にとって重要なのは、「合理」か「迷信」かということではなく、それが軍事にとって「利」を齎すか否かということであった。一見「迷信的」「呪術的」に見える後半十巻の内容も、それをそのまま盲信するということではなく、最後は、将軍が如何に冷静に活用するかという人為の問題として捉えられていたのではなかろうか。即ち、『虎鈐経』の前半十巻と後半十巻とは、先行研究が指摘するように、前者が「合理」的兵学、後者が「迷信」的兵法として矛盾したまま無関係に混在しているのではなく、許洞の意図によって各々意義を持ちつつ配置されているという可能性が高いと思われるのである。[20]

確かに、『孫子』流の合理的兵学と「兵陰陽」の兵法とは、思想的には相容れず、対極に位置すると考えられる。前者が軍事を「人」為の枠内で考究するのに対し、後者は「天」と「人」との密接な相関関係、或いは「人」に対する「天」の優位を主張するからである。しかし、これまでの検討結果に基づけば、『虎鈐経』は概ね次のような論理によってその両者を併存させているのである。

先ず、許洞は、大枠では緩やかな天人関係を認めている。冒頭の諸篇に見られたように、「天」「地」「人」は軍事に於て重視すべき三つの柱であった。しかし、その「天」「地」の内実は、決して「迷信的」「呪術的」なものではなく、気候・地理といった「科学的」内容であった。しかも、これらは単なる鼎立の関係にあるのではなく、最終的には「人」事が勝敗を決定するとして、許洞は「天」の強い拘束を否定する。これは、巻一に明快に論じられたところであり、かつまた後半十巻の諸占術を説く箇所に於ても、人為による占断の変更の可能性が説かれるところであった。

従って、このような理論調整を経た結果、『虎鈐経』は、この内のどちらを強調するかによって、篇ごとにやや論調を異にすることと

なった。前半十巻では、「人」の重要性を念頭に置いて人為に関わる内容を説くことから、「天」への言及は稀薄となった。逆に、後半十巻では、最終的な「人」為の重要性の説明が省略され、「天」の内訳が詳述されることとなった。その結果、前半十巻は「合理的」「科学的」との印象を与える一方、後半十巻は「迷信的」「非科学的」に見えるという、対照的な評価を招くに至ったのではなかろうか。このように、二段階の論理を用意したところに『虎鈐経』の特質があり、またそのことが、「合理」「迷信」という指標では割り切れない『虎鈐経』の総合的内容を形成したと推測されるのである。

## 第五章　『虎鈐経』の思想史的位置

さて、『虎鈐経』の思想的特質が概ね右のようなものであったとすれば、それは、後続の兵書にも何らかの影響を与えたのではなかろうか。既に、前記の馮東礼・毛元佑『北宋遼夏軍事史』は、『虎鈐経』が後世の『武経総要』『何博士備論』などの成立に強い影響を与えたと評している。最後に本章では、『虎鈐経』が後の兵書に与えた具体的な影響について、『武経総要』を手がかりに若干の考察を加えてみることとする。

『虎鈐経』の成立から約四十年の後、北宋の仁宗は曾公亮・丁度等に兵書の編纂を下命した。慶暦三年（一〇四三）に完成した全四十巻からなる大部の兵書が『武経総要』である。『虎鈐経』成立後では初の本格的兵書であり、また、所謂「奉敕撰」の国家的事業でもあった。その構成は、前集・後集に分かれ、前集は制度十五巻、辺防五巻から成り、後集は、故事十五巻、占候五巻から成る。[21]

この書の評価について、『四庫提要』は次のように述べている。

仁宗は守成の令主為り。然れども武事は其の長ずる所に非ず。公亮等も亦た但だ太平を襄賛し、未だ将略に嫻(なら)わず。言う所の陣法戦具は、其の制弥々詳らかなれども、其の拘牽弥々甚だし。大抵所謂譜を検して角觝するなり。諸番の形勢に至りては、皆伝聞に出ず。言う所の道里山川は、今日を以て之を考うるに、亦た剌謬多し。然れども前集に一朝の制度を備え、後集に歴代の得失を具うるは、亦た考証に資するに足る者有り。……宋一代朝廷の武備を修講するの書、存する者は惟だ此の編のみ。固より宜しく存して史志と相参ずべきなり。

即ち、『武経総要』は文治主義下で編纂されたため、内容には牽強付会や伝聞に基づく誤りも多い。しかしながら、「制度」（前集）、「歴代の得失」（後集）を具備している点は高く評価できる。そして、宋代兵書のほとんどが散逸してしまった現在、本書は「宋一代朝廷の武備を修講する」唯一の書である。『四庫提要』の評価をまとめるとこのようになるが、ここで特に評価されているのは、『武経総要』の総合性であり、その歴史記録書としての性格である。軍事に関わる諸情報を収集し、全四十巻の中に具備しているというのが、評価の主な対象なのである。

こうした総合的兵書の来源について、『中国兵書集成』第三冊（『武経総要』）の「編輯説明」は、唐の杜佑『通典』兵志の存在を指摘している。つまり、『通典』という「制度」を網羅する文献が、『武経総要』の内容や構成に影響を与えたとするのである。確かに、百科全書的な『通典』の存在は無視できない。その「兵志」は、軍事の総論「兵序」「敍兵」「収衆」「選択」「立軍」（兵一）「法制」（兵二）等に始まり、「料敵制勝」（兵三）「間諜」（兵四）「撫士」「明賞罰」（兵五）などの各論を経て、「風雲気候雑占」（兵十五）に終わる総合的内容を備えている。[22] またこの『通典』に加えて、宋代以降、大量に生産される「類書」群も、同様の意味で注目すべきであろう。先行する文献の記述を基に、それらを整理・分類して掲げようとする「類書」の存在は、かかる総合的兵書の形成にも一定の影響を与えたことが予想される。

但し、そうした言わば外形的な影響関係以上に注目されるのは、後集の五巻分を占める「占候」の内容である。これを収載した『武経総要』の意識は如何なるものであったろうか。その意識が『虎鈐経』に類似するものであったことが、後集巻十六の「敍」から推測される。即ち、「抱珥虹蜺、迅雷妖風、怪雲変気」といった天文の変異は「皆陰陽の精」であり、「其の本は地に在りて上は天に発」したものであり、そのこと自体は無視できない。しかし、それに拘泥してはならない。「拘（とら）わるる者をして之を為さしめば、則ち禁忌に牽かれ、小数に泥み、人事を捨て、鬼神に任ず」という「人事」の無視に陥るからである、と。

こうした認識は、「天」「人」関係に対する『虎鈐経』の理解と酷似している。『虎鈐経』も「天」を尊重し諸占術を列挙しながらも、それらを理解して選択するのは結局「人」の側であることを繰り返し強調していた。占星や占雲気などの諸占は、確かに軍事にとって不可欠の要素ではあるが、それに拘泥して肝心の人為的努力を放棄してはならない。こうした許洞の思想は、この『武経総要』にもそのまま継承されていると言えよう。従って、『武経総要』の「総合」的性格とは、単に古今の制度を網羅したという意味に止まらない。それ

は、兵学思想そのものの「統合」をも物語っているのである。[23]

## 結　語

以上、本稿では、北宋の許洞の『虎鈐経』について考察を加えてきた。その結果、『虎鈐経』の兵学思想は、孫呉流の権謀的兵学を根幹としつつも、その中に「兵陰陽」的要素を包摂している、との状況にあることが明らかになった。この兵学的特質は、前稿で検討した『太白陰経』と共通するものであり、許洞が『虎鈐経』編纂の際に、『孫子』とともに『太白陰経』を基盤にしたと宣言していることを裏付けている。

また、『虎鈐経』の総合的兵書としての特色も、明らかに『太白陰経』を継承するものであったが、『虎鈐経』では更に、「凡そ六壬、遁甲、星辰、日月、風雲、気候、風角、鳥情より以て宣文設奠、医薬の用、人馬相法に及ぶまで、具載せざるは莫し」（『四庫提要』）という軍事の百科全書としての性格も、より鮮明となっていた。

こうした総合化は、世界の事物を再編して一書に収録せんとする「類書」に刺激された面もあったと考えられ、また一方では、兵学思想自体の流れという観点からも、やがて辿り着く一つの終着点であったと推測される。[24]

次の明代に於て、唐順之は、「武経七書」の兵家言に「李筌」「許洞」の言を加え、『武編』を編纂した。このことは、『太白陰経』『虎鈐経』の両書が「武経七書」に並んでその重要性を認識されたことを示唆しているであろう。「武経七書」以降、中国の兵学思想は、総合化・百科全書化という一つの潮流を形成して行くこととなるが、その流れを促したのは、李筌の『太白陰経』であり、またそれを決定づけたのは、この許洞の『虎鈐経』であった。

### 注

(1) 唐順之、字は応徳、義修、江蘇武進の人。正徳二年（一五〇七）の生まれ、嘉靖八年の進士。『明史』巻二百五列伝第九十三参照。その著『武編』は、前集六巻、後集六巻から成り、前集は、将・士・制・練・令など五十四門、軍事理論、戦略・戦術の問題について、古代兵法や前人の理論を引用しつつ論述し、後集六巻は、明代以前の戦争事例を取り上げ、料敵・撫士・信・勇・厳・賞などについて論述している。

但し、唐順之の生前には出版されず、後に焦竑がその手稿本を得て、万暦末と後金興戦の際に武林の出版家徐象樗に交付して刻印した。

(2) 『虎鈐経』自序に「臣今上は孫子李筌の要を採る」とある。その詳細については、第四章で後述する。また、許洞の伝記については、『宋史』巻四百四十一列傳第二百文苑伝参照。また、その著『虎鈐経』は、同じく『宋史』芸文志子類兵書類に、「許洞虎鈐兵経二十巻」と著録されている。

(3) 詳細については、拙稿「『太白陰経』の兵学思想」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第四十巻、二〇〇〇年)参照。

(4) 高鋭主編『中国軍事史略』は、『虎鈐経』の前半十巻は、前人の兵学理論を総合したもの、後半十巻は陰陽八卦や占雲望気などの内容で学術的価値は少ないと論ずる。また、張雲勛『中国古代軍事哲学発展史簡編』も、『虎鈐経』の前半十巻は用兵作戦の問題を論述しており、素朴唯物論と弁証法思想が見られるが、後半十巻の陰陽占候などの内容には迷信的要素が多く、識別して考える必要があると説く。柳玲『中国古代兵書』は、『虎鈐経』の内容は極めて豊富であり、そこに集成された軍事関係の天文・暦法・歳時・方位などの知識は、過去の兵書には見られなかったものもあると説く一方、天人感応などの荒唐無稽な内容(後半十巻)には価値がないと断定する。

(5) 『漢書』芸文志は、劉向・劉歆父子の図書整理を承けて、兵書を「兵権謀」「兵形勢」「兵陰陽」「兵技巧」の四種に分類して掲げ、計「五十三家七百九十篇図四十三巻」とその総数を記す。

(6) 但し、その編輯説明によれば、巻十六の一五七~一六四篇は原欠のため編集部が補配したものであり、また、依拠した明刻本は書末に名将の事跡を付録しているが、これは明初人の附入したもので許洞の原作ではないから刪去した、とのことである。

(7) 特に、『呉子』『孫臏兵法』『尉繚子』には各々特徴的な士卒選抜の思想を窺うことができる。この点の詳細については、拙著『中国古代軍事思想史の研究』(一九九九年、研文出版)第二部第一章~第三章参照。

(8) 「武経七書」所収の主要兵書が「兵陰陽」の思想に対して如何なる姿勢を取っているかという問題については、注(3)の拙稿参照。

(9) 『三国志』魏書巻十四蔣済伝に「文帝即王位、轉為相國長史。及踐阼、出為東中郎將。濟請留、詔曰、「高祖歌曰安得猛士守四方。天下未寧、要須良臣以鎮邊境。如其無事、乃還鳴玉、未為後也。」濟上萬機論、帝善之。入為散騎常侍」とある。また、『隋書』経籍志・雑に「蔣子萬機論八巻蔣濟撰(梁有篤論四巻、杜恕撰。芻蕘論五巻、鍾會撰。梁有諸葛子五巻、吳太傅諸葛恪撰。亡)」とある。

(10) このような当時の状況に注目するものとして、劉慶『中国宋遼金軍事史』(人民出版社・百巻本《中国全史》叢書、一九九四年)がある。劉氏は、『虎鈐経』の後半十巻を、現在から見れば荒唐無稽なものであると評しながらも、当時の行軍用兵には必要とされていたものであると説いている。

(11) 占断を受容する側にとって、こうした占術者の「口」が重要であったことについては、拙稿「中国古代の夢と占夢」(『島根大学教育学部紀要』第二二巻第二号、一九八八年)参照。

(12) この点に配慮してか、馮東礼・毛元佑『北宋遼夏軍事史』(軍事科学出版社、『中国軍事通史』第十二巻、一九九八年)は前半十巻を科学的に兵を論じたものと評価するが、その際に、「相人」の問題は除外すると述べている。

(13) こうした思考自体は、歴代正史の天文志にも記される伝統的思考である。例えば、『漢書』天文志に「凡天文在圖籍昭昭可知者、經星常宿中外官凡百一十八名、積數七百八十三星、皆有州國官宮物類之象」と見える。

(14) もちろん、軍事に於ける占雲気は、「兵陰陽」思想に属する技術である。『史記正義』引く崔豹『古今注』は、中国最古の戦争とされる黄帝・蚩尤の戦（涿鹿の戦）に於ても、黄帝側には常に「五色雲気」が漂っていたと説く。また、占雲気の具体的様相を図入りで示す資料としては、敦煌発見の占雲気書残巻がある。これについては、何丙郁・何冠彪『敦煌残巻占雲気書研究』（芸文印書館、一九八五年）参照。なお、これら占雲気を「兵書」という観点から紹介するものに、安居香山『緯書と中国の神秘思想』（平河出版社、一九八八年）がある。

(15) 「天」と「人」との関係に於けるこうした考え方は、『易』を初めとする漢代の「占」観と同様である。この点については、注（11）の拙稿参照。

(16) 「重門擊柝」は幾重にも門戸を造り夜間に拍子木を撃ち鳴らして警戒することで、防備を厳重にする意。『易経』繫辞伝下に「引重致遠、以利天下、蓋取諸隨。重門擊柝、以待暴客、蓋取諸豫」、『三国志』呉書薛綜伝に「夫帝王者、萬國之元首、天下之所繫命也。是以居則重門擊柝以戒不虞、行則清道案節以養威嚴」などと見える。

(17) 「拓統」については、『漢書』揚雄伝に「惟漢十世、將郊上玄、定泰畤、雍神休、尊明號、同符三皇、錄功五帝、卹胤錫羨、拓迹開統」、その注に「應劭曰、卹、憂也。胤、續也。錫、與也。羨、饒也。拓、廣也。時成帝憂無繼嗣、故修祠泰畤、后土、言神明饒與福祥、廣迹而開統也」とある。

(18) 中国兵学に於ける戦争の正当性の問題については、注（7）の拙著第三部第四章、及び拙稿「中国古代に於ける戦争論の展開―『呂氏春秋』『大戴礼記』の蚩尤観をめぐって―」（平成五年度文部省科学研究費補助金一般研究B研究成果報告書「『史記』『漢書』の再検討と古代社会の地域的研究」、一九九四年）参照。

(19) 師曠は、春秋時代の晋の楽師で、よく音を聞き分け、吉凶を占ったとされる。また、離婁は黄帝時代の人で、超人的な視力によって「百歩の外」から「秋毫の末」（微細なもの）を見分けることができたという。

(20) また、先行研究の内、前半十巻を合理的兵学とした上で、具体的には『孫子』から『太白陰経』に至る兵学を総括したとするものについては、若干の注意が必要となろう。何故なら、『太白陰経』は確かに孫呉流の権謀的兵学を基盤にしてはいるものの、「兵陰陽」的要素をも柔軟に包摂している点に兵学思想としての特色があり、この点が『虎鈐経』にも大きな影響を与えていると考えられるからである。

(21) 但し、「制度」「故事」等の名称は、仁宗が叙に「制度十五巻、辺防五巻、故事十五巻、占候五巻」と記したことから、通行していったもので、原書にはこの四部の標題はなかった。また、テキストには、四十巻本と四十三巻本とがある。四十巻本は多くは抄本であり、成書時の面目を保っている。また、四十三巻本は多くは刻本であり、四十巻本を基に増衍して成ったものである（辺防を七巻とし、占候を六巻に増加）。なお、四十巻本の成立についても、判然としない部分があるが、こうした問題の詳細については、『武経総要』を、遼寧省図書館蔵明万暦金陵書林唐富春刻本を底本として（少数の不鮮明葉については、南京図書館蔵の同一版本により補入）採録する『中国兵書集成』第三冊の「編輯説明」を参照。

(22) 但し、『通典』兵志に於ける「風雲気候雑占」の取り扱いは、『虎鈐経』や『武経総要』とはやや異なる。即ち、「風雲気候雑占」を収録する兵十五の大半は、やはり人為主体の兵学的内容であり、特に「推人事破災異」の項は明快に「災異」を否定して「人事」の重要性を説くものとなっている。また、「風雲気候雑占」自体も、杜佑が「語に曰く、天時は地利に如かず、地利は人和に如かずと。故に末篇に附す」

と注する通り、「附録」としての位置づけに過ぎない。従って、『通典』兵志を、『虎鈐経』や『武経総要』の兵学思想上の直接的淵源とすることには問題があろう。

(23) 『宋史』外国伝、高麗に「其国俗陰陽鬼神の事を信じ、頗る拘忌多し」と見えるような近隣諸国の習「俗」や、自軍の士卒や敵の将卒の中に「迷信」に囚われている者が多いという状況は、軍事に於ける「兵陰陽」的要素の存在意義について、重要な示唆を与えてくれる。『太白陰経』『虎鈐経』『武経総要』に共通するのは、様々な占術・迷信が軍事の場に於て強い影響力を持っているという現状認識である。その結果、将軍はこうした要素にも精通し、軍事に「利」があると判断すればそれを積極的に活用すべきである、との結論に達しているのである。

(24) こうした統合化が、「中華」の枠に固執する中国兵学思想の限界でもあったことについては、注(3)の拙稿に於て既に言及した通りである。『李衛公問対』に於ける対夷狄の問題については、拙稿「『李衛公問対』の兵学思想」(『大阪大学文学部紀要』第三十九巻、一九九九年)参照。

【附記】 本稿は、平成十二年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)による研究成果の一部である。